

わが愛する歌 ― 名歌鑑賞 ―

二反田 實

壽西之法之外勿達單皮所六格革里氣尼法乃挨殺雞蘇路隔搖那 候繼高

十七八は、二度候か、枯木に花が、咲き候かよの (渡邊 三男訳)

「明音^{みんおん}」で日本の舟人が口遊んでいたものを書き止めたものとされ、「全漸兵制考」第五に「附日本風土記」として「山歌」の頃に記載されています。私は、高校二年生の時、進学勉強にも役立つと思い「谷山茂・塚原鉄雄著」の「一日一題国文法の研究」という一冊を求め、本文よりも欄外の色々な言葉を楽しみに見る方が多くなりました。その二五七頁に訳文で「日本風土記」とだけ出典が記されていたものです。

この謡は今までもどうしても忘れる事が出来ず、今度「高山図書館」の司書さんをお願いして「日本風土記」なる書を調べてもらい、頭書のような事がよく判ったようなわけです。十七歳より五十年の歳月が益々私を動かしたと思われれます。「和寇」の一人かもしれない水将が口称した俗謡とも思われる言葉がこうして「音」で聞えるように思われて、私はさらに感動したものです。

人間の情と悲しみは全く昔も現在も変わる事はありません。この謡の題は「青春嘆世」とされ、その前には「少女別朗」その後には「善女憶郎」、いずれも人間の根本的な悲しみ、万古不易の「老いと死」を根底にした謡と私は考えるのですが、大方の皆様に「情けない」と哄笑を受けるでしょうか。

卷頭言

西洋の詩人T・Sエリオットは四月は残酷な季節と詩ったが、日本ではやはり桜さくらである。まさおなる空よりしだけざくらかな、という富安風生の伏姫桜を詠んだ句碑が市川の弘法寺の境内にある。まこと見事な桜である。

桜といえば、やはり、西行の、ねがはくは花の下にて春しなんそのきさらぎの望月もちづきの頃、である。花とは勿論桜。

兵衛尉佐藤義清は、保延六年（一一四〇）二十四歳の若さで有望な官途を捨て、出家して「西行」と名乗った。西行の出家の動機を、川田順（『西行』）は厭世説、恋愛原因説、政治原因説、とその総合原因説をあげているが、藤岡作太郎の「西行にとりては和歌は遊戯文学にあらず、はしむ擅に山川花月に對して、おのが感情を述べんとするにあり」（『異本山家集』）として天性の詩人は詠歌を余技とする官人に飽きたらず遁世の道を選んだとする説を採りたい。

世を厭いもし恋に破れたことも政治に無常を覚えたこともあるう。しかし、畢竟、西行は和歌に出家したのである。詩歌に出家したのである。西行にとり桜の花は和歌であり詩歌の象徴であった。詩歌の下で死ぬことを願ったのである。

歌人はすべからず詩歌に出家しなければならぬ。日常生活から出家して詩歌の世界に入りまた其処をでて現実世界に戻る。そしてまた詩歌の世界に没入しまた戻る。その往還こそ歌人の生きる道であると思考する。

（松岡）

太陽の舟 目次

三十二卷 四月号（通卷三〇四号）

わが愛する歌 — 名歌鑑賞 —

二反田 實

卷頭言

松岡 三夫

二十五首詠

杉山 榮子

阿部正路論（第一〇二回）

須藤 宏明

歌誌散見（第七十八回）

豊泉 豪

作品Ⅰ

小林 絢子 他

一月批評（作品Ⅰ）

宮原喜美子

（作品Ⅱ）

富永 道子

合 評（座談会）

角田 順子・土方 澄江

選者十首

酒向 一次・渡辺 幸子

秀歌拔芳（三〇二号）

高崎 邦彦

作品Ⅱ

森田 勝昭 他

作歌の目・作歌の技法（第六十三回）

三木 勝

文法講座（十六）

奥田 清

全国大会のご案内

山田（紀）・生稲・松岡

歌会・支部報告 他

山田（紀）・生稲・松岡

編集後記

山田（紀）・生稲・松岡

題字

阿部正路

阿部正路

阿部正路

月に寄り花によせて

杉 山 榮 子

庭隅に返り咲きぬしクレマチス夫かとぞ見て仏花まゐらす
直ぐ立ちし秋明菊の咲き終へて身めぐり一人二人去りゆく
桔梗まだ咲いてゐるとて独り身の友はしなやかに父祖の地守る
C P O の足並み乱れ畦道に蒲公英咲きつぎて師走に入れり
普天間とC P O の難題に年の瀬日本はストレス列島
昏れすすむ空に色濃き半月の浮かびて心にあかりを点す
外に出れば雪かと紛ふ月光は異界の気配に冴えわたりたり
雨戸繰り見上げし月に語りかく「とんがらないで」と今宵三日月
暖冬に葉陰に見つけし蔭の臺やり過ごしては春まで待たな
花好きの親しき人逝きさびれゆく垣の高枝に山茶花赫し

香港で息が買ひくれしクリスタル梅枝に垂りて虹ばらまけり

可憐さに求めて挿花すチューリップ向き合う姿にポエムを探る

雪柳と紅き椿に照葉添へ瓶花に春の語らひを聞く

万年^{おもと}青組み梅枝添へて春迎ふ新しき年いやしけ吉事

年末は家事なしにつつ第九聞き最終章での歓喜を歌ふ

元日の望月見上げ声挙げぬ子と孫と吾の一会たつとし

訪れる吉とは見たし初春の満月われらの頭上に降りて

孫たちの未来語らふ座に入らず洩れ聞こゆるを慰めとせり

言い過ぎも言はずじまいも淋しかり心添はさで去にし孫^こもいて

一握り若菜摘み来て七草となし口ずさむ「鳥追いの唄」

臘梅の香に偲ばるる大枝を惜しみなく賜びし今は亡き女

大寒を寿ぐごとく臘梅は黄金^{こがね}のぼんぼり灯しゆくなり

古木なる藤のよぢれし荒幹に触れては春待つ心かよはす

沈丁の香に時越えて誘はる父母の声さへ聞こゆ庭の辺

めぐり来し睦月満月身に降りてかぐや姫でなき吾に生あり

阿部正路論（第百二回）

阿部正路論

須藤 宏 明

―大衆の文学、庶民の短歌―

阿部正路の、文学に対する根本的な思惟に、芸術の高級化への抵抗がある。芸術の高級化とは、即ち、庶民離れを意味する。阿部は、随所で「落語が高級化してはならない。高級化すると、結局、庶民離れしていくことになる。落語は基本的に大衆のものである。明治以後、歌舞伎が高級化していき、大衆から離れていったことを考えねばならない。」というような言説をしている。これは、古今亭志ん生が、まわりに「芸術家・志ん生」と言われて「俺は、芸はするけれど、術は使わねえよ」と言い放ったことと、考えを同じくするものである。

これは、何も落語に限ったことではなく、文学、短歌の基本原理にも通じることである。阿部にとって、短歌は庶民・大衆のものであり、決して、高級化した気取りの文学であってはならないものである。それを証明しているのが、阿部の、大衆文学・農民文学・日本近代民俗文学の対する論究の数々である。阿部は、水上勉の『うつぼの筐舟』という佐渡島の民俗に題材をとった推理小説に対して「水上勉氏は、推理小

説の領域でも、大衆文学の領域でも活躍した。」と述べ、その文学の本質について、

近代日本民俗文学の領域を確立するためには、大衆文学の領域にも積極的にふれてゆかなければならない。（中略）農民文学の領域もまた、近代日本民俗文学の領域と深くかわりあいを持つ世界を内包している。（『日本近代民俗文学論』おうふう 平成十年四月・二十七頁）

と、大衆文学と農民文学と日本近代民俗文学との関係を強調している。ここでの阿部の論拠は、伊藤永之介の「農民の立場から農民を描いたものが農民文学」（同・前掲）という捉え方である。つまり、大衆の立場から大衆を描く文学、日本の民俗を支えている庶民の立場から庶民を描く文学の重要性を説いているのである。これは、短歌にも同じことが言える。短歌は、市井に生きる「私」の立場から、「私」を描くことが必要だという思念に通じる。

大衆文学という用語は、大正後期になって作られた造語である。白井喬二という時代小説を書いていた作家が作り、広めた用語である。大正期になり、講談もの、時代ものといった娯楽的な小説に対して、最初は民衆文学と言おうとしたのだが、民衆という言葉は当時台頭していたプロレタリア文学と混同されるという懸念から、元来は仏教用語であった、大衆という言葉を持つてきたのである。大正期になり、文学の高級化が問題となった頃、多くの庶民の立場を重んじた文学、つまり大衆文学が必要となったのであろう。阿部は、この重要性を指摘しているのである。

歌誌散見 第七十八回

豊 泉 豪

「ふいめえる」②

「ふいめえる」三九号（〇九年五月）、四〇号（十一月）から、短歌作品を鑑賞する。

・空深く白鳥が舞ひ朱鷺が舞ふ越路は深く雪積る街

「太陽の舟」に所属する石塚立子氏の歌である。長岡の夏の花火を歌った一連中の作なので、作者は冬の風景を眼前にしているのではなく、追想しているか、おそらくは幻視しているのだろう。深い雪に覆われた街と対比される空は、冬の日本海沿岸特有の、厚い雲に閉ざされているに違いない。はじめ「深く」の繰り返しが気になったが、あえて同じ形容詞を用いることで天と地の境界を消し、あるいは逆転させているのかも知れない。雪の地下に鳥が舞い、空に魂が閉じ込められる心象風景だろうか。一連の底流には戦災と震災に寄せる思いがあり、掲出歌も鎮魂の歌と読むことができる。

・グランドのフェンスのカンナ刈り取られ雨は真直ぐにひと日降りつぐ 宇佐美矢寿子

カンナは夏から秋にかけて咲く花である。葉の大きいカンナが刈り取られてしまったことで、真直ぐに地面を叩く秋の雨脚がはっきりと目に見えたのであろう。あるものを足し算式に描くのではなく、かつてはあって今は無くなってしまう

たものに目を向けることで、現在を浮かびあがらせる。そこに、時の移ろいやその中に身を置く人間の心象、情感が自ずから表出される。背景の誰もいないグラウンドが、夏から秋への季節の移ろいを感じさせ、効果的である。

・赤まんまに秋の日差せり庭隅の一群ゆえに引かず残せり

石神 順子

赤まんまはイヌタデ（犬蓼）の別称である。細かく穂をなすピンク色の花が、子どもママゴトでお赤飯になることからそう呼ばれる。結句「引かず残せり」に、他の草は抜いてしまったことが表れている。ありふれた雑草である庭隅の「赤まんま」を「秋の日」が祝福しているようである。前掲歌と同様、さりげない日常の風景を独自の角度で切り取っているが、一首がやや説明的になっているのが気にかかる。上の句と下の句を入れ替えて再構成してみたらどうだろうか。

・パソコンに閉ぢこめられし生年月日わが生れし日は乾きてゆかむ 星田郁代

生年月日とは、命の誕生という何物にも変えがたい瞬間を記念する数字であらう。それを満たしているのは父母の血、そして思いである。あるいは連綿と続く命の連鎖のドラマ。〈個人情報〉の〈保護〉が叫ばれて久しいが、この言葉は何とも皮肉なものだと思う。〈情報〉として〈保護〉されることで、単なる数字・データとして、また金に換えるものとして扱われることになる。結句「乾きてゆかむ」は的確な表現だと思うが、「閉ぢこめられし」がやや過剰であらうか。

二月批評（作品Ⅰ）

宮原喜美子

・朝冷えの庭の水仙床の間に生けて暈とほのかに香る

堀川喜與志

水仙と新畳のほのかな香りを楽しんで居られるのでしょう。端然とした部屋の佇まいが感じられます。

・身の程の小さき祈りささげ来て下る山門もみぢくねなる

木村恵美子

石山寺にお参りした時に詠まれた歌の一つ。人それぞれの悩みは、他人にはどうあれ小さくとも深いものです。「身の程」とはいえ、祈りささげた安堵感の様なものが伝わって参ります。

・秋田落の広葉はげしく踊らせて日照雨^{そばえ}すぎたり時の間にして

小林 絢子

・乾きたる土の埃を舞い上げて大粒の雨走りゆきたり

込山 千代

この二首は通り雨の様子をとでも生き生きと表現していて面白いと思いました。違う場所でも、それぞれの方が体験されたことなのに同じ雨を見ている様です。

・夕映えの雲をふちどる輝きにふと萌しくる希望なるもの

佐伯 朋子

夕焼けの空を見ているいろいろな思いが浮かんで来ます。来し方行く末、極楽浄土。最後の輝きに希望を感じて一

日が終わっていきます。

・溪ふかく奔れる水の清冽に魚の影いくつがはしる

末次 房江

上の句に読み手を強く引き込む力があり、私も一緒に水の中の魚の影をさがす気持ちになりました。

・暗緑の光をはなつ鉱石が科学をこばむ静けさをもつ

玉川 愛子

博物館の中に鎮座する石、その石の生成には、気の遠くなるような時間の流れがあり、そこに漂う静けさを「科学をこばむ」と表現されました。

・底ごもるかなしみ誰が消しゆかむ満天星の朱いまを盛りに

月田 藤枝

「底ごもるかなしみ」とはどこまでも深い悲しみのこと。「満天星の朱」との対比が、一層悲しみを深めます。

・かけがへなき夫婦の温もりつと絶たるたまゆら思へば身の締むる宵

中村 陽子

「つと絶たる」という表現にハッとしました。何と適確な表現でしょう。そんな日が誰にもいつか来る。覚悟しなければと身の引き締まる思いが致しました。

・土おこし初めて種蒔くさやえんど白花につく小舟待ちつつ

深谷 幸子

土に種を蒔く時、作者はもう半年も先のことを思い描いている様です。そこには希望があり、さやえんどの形の、特につき始めの小舟の可愛らしさが目に浮かびます。

二月批評（作品Ⅱ）

富永 道子

・誇らずに自慢もせずに輕蔑もめぐみとなして秋風の中

三木 勝

このように在りたいと心のどこかに置きながら、つい、我を立て、我を張り通します。ここに私は、「我を殺す」を織り交ぜて活きることにします。

・時によりて揺れ動きいる満足度均してみれば中位なり

宮原喜美子

それぞれの満足度は各人により、理由の様々により、昨日とも違ってくる。中位ほど意義深い満足度はないと思えます。作者の満足度の対象は何かしら？ 不満ばかりの私は、私だけの時間があった時、中位。

・一冊の手帖に証す一年の未熟の生きざま封印すべし

森本 元昭

一年のしめくりに封印を決心した手帖。時を経てから読み直して、生きた証しや懐かしい思い出が甦り、この封印の意義を改めて深くされることでしょう。

・山の宿の夜の暈に迎へくる亀虫一匹旅の刻印

山田田鶴子

嫌われものの亀虫を「迎へてくれた」と観察して、忘れられない旅とした。身の回りの些細なことにも気配りの届く作者ならではの生き方と思います。

・佐渡の海巖打ちくる白波の碎けて暗く冬を呼ぶなり

山名 恒子

未経験ながら、佐渡の冬の厳しさや、流罪に耐えた幾多の人々の叫びまで聞こえそうな七首。移ろう四季に彩られた、重い歴史が旅人を引き寄せるのでしょうか。

・就寝時コホロギコホロギ声聴けば静かな暮し明日に続く

吉田 律子

ほっとして、ぐっすり眠れそうな一首。静かな暮しだからこそ、身近な歌として完成し、明日への期待を感じます。

・この頃は猫との会話増えてきて開けたら閉めてと言ってもみたり

今井 芳枝

お住いは学校の近く？ 内緒で三〇〇球もの水仙を植え、リコーダーに聞き入り、水溜りを飛ぶ子供達を気遣い、そして猫とも楽しくおしゃべり。花盛りの水仙が待ち遠しいです。

・しまなみの海道に昇る初日かな平山郁夫逝きて煌めく

松岡 三夫

しまなみ海道は、尾道から今治を結ぶ美しい海の道。シルクロードで有名な平山郁夫はその島のひとつ高根島の出身。作者はその向かいの島の出身。私は旧姓が平山。それにひかれて瀬戸田にある美術館を訪ねたことがある。平山の美しい繪がしまなみの美しい光景と重なって思い出される。

・薙刀部にゐた日をふっと想ひだし何も持たずに構へてみた

江面 伸子

きりつと背筋を伸ばし薙刀の構えをしたのは、ふと思いついての行動だが、薙刀部に在籍していた若き日は体が記憶しており、ふっと出てきたのである。それは作者の前向きな心と姿勢なのである。これから作者を支え続けるであらう。

合評

座談会

司会 今月は二月号から四首を選んで合評を行います。一首目は、岐阜支部の二反田實会員の

霰とも雨ともつかぬ十六夜は秋深くして老いを知りたりです。解りにくい歌ですが、Sさん如何でしょうか。

S 「十六夜は」の「は」はおかしいので「の」に直して、「十六夜の秋深みきて老いを知らしむ」にしてみてもは。

I 私はよく解らないのですが、月が出ていなくても十六夜の夜だ、と解るのでしょうか。

T 十六夜というのは、月が出ていなくても満月の次の日の夜のことを言います。主に十六夜は新暦の十月、仲秋の頃を言います。作者は多分「十六夜」と「秋深く」は別々と考えていると思うけど、表現としては重複しています。「十六夜」があれば「秋深くして」は要らないけど、「秋深く」を言わないと「老いを知りたり」が導き出せないのではありません。

S 初句に霰と雨がでてきて、季節が渾然としている感じがしますけど、どうでしょうか。

T 作者の住んでいる所は岐阜県の高山で、秋の深まっている時期なので、これで良いでしょう。

I 私は月のことをあまり考えない生活をしているけど、この作者は月が生活に結びついていてる感じがする。昨日の月と今日の月は違うとかしっかりとした自然のバックボーンがあるのですね。妬ましいほどうらやましい。

T 「秋深く」を取って、自分の老いをしみじみと知らされるのを詠んだほうが良いです。

Y そうですね。お酒を飲んでも老いが感じられるとか詠い

込むというと思います。

T 「知りたり」より「老い深く染む」と、止めたいですね。司会 では、次は月の船支部の飯塚裕子会員の

落葉し眠りに入るけやきの木電飾つけられ夢うつつなりです。どなたからでもどうぞ。

S 電飾を付けられているのは表参道の木でしょうか。

T 今は全国いたる所であります。

S 私は勝手にですけど、この歌を直してみました。「葉を落とし眠りに入れるけやきの木電飾つけられ夢やぶらるる」

T 私も直してみただけど、Sさんとは同じですね。

I 私の解釈は違います。作者は電飾をつけられた木を見て肯定的に詠んでいるような気がする。電飾をつけられて木も喜んでいるな、というニュアンスの歌だと思う。

T Iさんの解釈だったら結句は「夢うつつ」ではなくて、「夢ごこち」になりますね。

I この歌は社会批判的なものではなくて、むしろ木は喜んでいっているように詠まれていて、作者はユニークな感性の持ち主だと感じました。

S 「つけられ」は他動的だから、木は迷惑をしているような感じに受け取れますね。

I 「夢やぶられる」という判断は、ごく常識的な人の見方で詩人の判断ではないと思う。

Y 「夢うつつなり」では、木が迷惑をしているのかどうかはつきりわからないですね。

T そうです。「夢うつつ」の中には、「幸福感」というものが無くて、木にとっては迷惑だ、という感情が入っていると思う。でも、人間の勝手に電飾をつけられた木を容認してい

るのか、批判しているのか作者の主旨がはっきり見えてこないです。批評が分かれるところですね。

司会 三首目は、千葉支部の照山好子会員の

冬の庭一手に担ふかのごとく赤き実放つ千両たのもし

を取り上げます。如何でしょうか。

I 私は千両を植えたことがないので解らないんですが、実を放つものなんでしょうか。

Y 千両の赤い実は、冬の庭を一手に担うように、鮮やかできれいなんですね。でも、「実を放つ」はおかしいですね。

S 私は何よりも「かのごとく」がおかしいと思う。

Y そうですね。「たのもし」もおかしいね。

I 「実を放つ」とは、どう理解したら良いでしょうか。

T 「放つ」は、捨てる、という意味ではなくて、赤い実が現われて光を放っている、という意味でしょう。

I そうすると、「かのごとく」と言わないで、「一手に担ふ」と言い切っても良いですね。

T 「ごとく」は難しいからなるだけ使わないように気をつけたいです。この歌では、「担ふ」と「たのもし」が重複しているし、全体に説明的です。冬庭の面白い所を見ているけど、千両の生命の情景描写がもっとほしいですね。

Y 私なりに直してみたのですけど。「冬の庭一手に担ふ千両のたわなる実の赤光放つ」と、又は結句を変えて「たのもしき赤」にしてみましたかと思いました。

T なるほど、そうですね。

S 私は最初、実は結ぶもの、落ちるもの、と思っていましたから。でも「実を放つ」は千両の実の赤の強さを表現していたのですね。

T そうです。このくらいの飛躍は良いと思いますよ。

I そうすると、「たのもし」と言わなくてもいいですね。

司会 四首目は、品川支部の湯本いと会員の

八十年を共に過して老進む健気な手指を湯船に抱く

です。如何でしょうか。

Y 良い歌だと思いました。啄木の「じっと手をみる」という歌も良いけど、この歌もよく解ります。八十年よく働いた自分の手をしみじみと湯船に浸している歌ですね。

T 「八十年を」とあるので「老い進む」はいらないです。

S そうですね。「八十年を」の「を」もいらなくないと思う。

T それと、「けなげ」もいらなくないね。どうしても言いたかったのしょうが、八十年を過ごしてきたのだから、傷ついた、皺がよったりしたでしょう。

S 作者は八十年の自分の手を表現したかったのでしょうか。

T それは解りますね。「湯船に抱く」という表現を、湯船の中に入って手指を胸に抱いた、という作りにすれば「けなげ」も内包できるのではないかと。

Y たしかにそうですね。

I 私としてはこの歌は欠点がないと思う。強いて言えば、「手」を省いて「指」だけでも良いと思う。

T 「手」と「指」は違うし、手は全体を表し、指は細部を表すので大事です。この歌は、省略しすぎの所もあるし、言い過ぎている所もありますね。

I 作者は「けなげ」や「老い進む」をどうしても言いたかったのしょうね。もっと感情を入れたかったのだと思う。

司会 本日はこれで終わります。ありがとうございました。

(記録 山田 紀子)

選者 角田 順子

(夕市)は雨にたたられ早や仕舞良き日もあらむ明日を待
たむ 久保田昭江

☆土おこし初めて種蒔くさやえんどう白花につく小舟待ちつ
つ 深谷 幸子

定期券購ふために並びをり三月は仕事^{みつき}を辞めぬこととす

熊谷 香織

宿の庭黄色の銀杏木枯しに舞ひつつ散れり秋の極まる

近藤 リイ

宇宙より還りし飛行士若田さん開けしハッチに先づ草の香
と 佐伯 朋子

苦も楽も確かに来る人生や味付け役は苦や難なるらむ

佐田 孝義

師走四日夜ぼんやり歩みて転びたりあるかなき風に導かる
ごとく 庄司 久恵

認知症の母を寝かせたその後は私の時間満たされた時

杉本 和子

しとしとと雨降る音を聞きながらゆっくりした気で短歌清
書す 菅谷 孝子

☆円空の木像飾る食事処囲炉裏の炭火小さく爆ぜる

多久和玲子

選者 土方 澄江

身の程の小さき祈りささげ来て下る山門もみぢくれなる

木村恵美子

物事につまずく度に思い出す亡母^はの戒め「最後の五分」を

久保田美智子

幼き日摘みし記憶をつなぐがに軒の一鉢赤まんま咲く

塩田 秋子

息子^こらにとり母親とふは分身の賞味期限の無きものらしき

志賀 倭子

白濁の湯の面の揺れをたぐりつつ今日の終りの孤独たのし

む 月田 藤枝

外食をさそふ孫らの声たのし口にあはざる食のあれども

鶴来けい子

秋の空絹雲流るるその先を私は飛ばうあなたの翼で

三木 勝

寅年の暦を抱えて帰る道やさしくなろうと思つひととき

宮島マツエ

剥き出しの太古の地球見ることし秘境に難無く佇てるにお
ののく 渡辺 幸子

山裾に楚々と咲きゐる四季桜愛でる人なく淋しさ漂ふ

遠藤 剛

選者 酒向 一次

風出でて梅の黄葉ははらと枝を離れぬ来む春がため

久保田昭江

弓なりにしなりて青に染まらざる古宇利大橋海のまほろば

高嶋 邦彦

☆円空の木像飾る食事処囲炉裏の炭火小さく爆ぜる

多久和玲子

はるかなる潮騒たちまち消え失せて吾は老いたる一粒の砂

玉川 愛子

☆土おこし初めて種蒔くさやえんどう白花につく小舟まちつ

深谷 幸子

視るときの花の静けさ手に取りて照葉の渴き秋の深まり

深谷 充代

時を待ち時を楽しみ生きてきて立ち止まりしも時は流れる

宮原喜美子

キャラメルは昭和の味と夫の言ういやドロップと吾はつぶ

村田 一江

やぐ
薙刀部にゐた日をふっと思ひ出し何も持たずに構へてみた

江面 伸子

り
長月と霜月かなし親友二人携え逝けり吾ひとり酌む

奥田 清

選者 渡辺 幸子

殉死といふ数多の奴隸の屍は殷墟いんきょの闇を見据ゑてゐたり

山田 紀子

苦き記憶：風の中なる穂芒が千の拒絶の手に見えしこと

小林 絢子

夢に來し夫の笑顔のきえぬ間にかく目を閉ず続きをみむ

富永 道子

と
柚子ジャムをたっぷりとかしほっとティーひとりぼっちの

富原 澄枝

時をゆたかに
雲間より陽の射す度に白富士の桃に映え初む對話のやうに

中村 陽子

ささやかな過ちひとつ意味と意味繋がらぬまま一つのはて

原田 寛

な
狩野川を額に引き入れ冬化粧を終えし富士山まさに絵葉書

森田 勝昭

沼面より春香り立ち水ぎはの角ぐむ葦の今日少し伸ぶ

石塚 立子

廃線のレール伝ひに陽は落ちぬ秋風身に沁む山間の地は

遠藤 剛

公園の広場の枯れ葉木枯らしのこえに応えて小人のダンス

岡部千代松

松島を誉めたたへたる芭蕉翁わが故郷を悪しく書きを

山田 紀子

私は川を知らない。私の人生に川は無かった。私は十五歳で故郷を出て八回住所を変えた。しかし一度も川の近くに住む事は無かった。おそらくもう無いであろう。そんな私にとって、この「川のある風景」巻頭二十五首詠は極めて新鮮で魅力に富んだ歌群だった。拔芳歌、作者の故郷は石巻、そこを流れる川は北上川。私は啄木の渋民村の北上川と賢治の盛岡の光原社の裏を流れる北上川を見た。美しく豊かな川だった。その河口が石巻漁港。石巻は奥の細道で、松島から平泉へ向かう途中の芭蕉が道に迷って石巻という港に出たとある。「思ひがけずかかる所にも来たれるかな」と、宿からんとすれど、更に宿かす人なし」(思いもよらずこんな所に来てしまったと、宿を借りようとしたが、いっこうに貸してくれない人がいない)作者はこの事を言っているのだろうが、書き残されているだけ素晴らしい。作者の川の旅は北上川を離れ利根川から中国大陸の黄河に及び京都の加茂川から再び利根川に帰る。「散策の利根川土手に春を聞く軽き水音と高啼くひばり」そこには北上川の四季を恋う私達世代の漂泊の思いと新しい生き場所を定めた故郷喪失世代の確たる覚悟と自信があふれていて深い共感を覚える。

冬日射す真つ白きレースのカーテンに落ち葉舞い散る
シルエットあり 梶川喜與志

「桐一葉日当りながら落ちにけり」高浜虚子の代表句。ある句評に「この句は多分、あれこれと捏ねあげた句ではなくすつと出て来た句のような印象を受ける。まさに虚子という俳人に降りた恩寵のような瞬間であり句である」とあった。拔芳歌は更にその落ち葉を冬日の差すレースのカーテン越しにシルエットとして見た。まさに実であり虚であり、光りであり影である二律の世界を俳句を越えて短歌の世界に結実した。

母親に送られて来し幼子を抱きて強くブルガリ匂ふ

熊谷 香織

「ブルガリ」とはローマの高級ブランド名。靴や鞄などの外に香水もある。拔芳歌、保育園であろうか、母親が連れて預けに来た幼子に母親の使っていた高級ブランド品の香水の移り香がしたと言う。それ程の贅沢が出来るなら我慢して自分で子供の面倒を見ればと思ふ読者も居るかも知れない。しかし作者は常に現実の背負う絶対矛盾を見逃さず歌材として取り上げ軽々な判断を下さずその奥を見ようとしている。私はその姿勢を良しとした。

細りゆく命傾け風の声聴くや秋津は翔ぶことをせず

小林 絢子

前々号 (302 号) 秀歌拔芳

秋田能代の晩秋の風景を美しくそして繊細に歌い上げて見事な七首の歌群であった。その中でも拔芳歌、もはや終命を間近にした蜻蛉の寂々とした時の流れを風の音と不動の蜻蛉で澄明に詠い上げた。作者の蜻蛉を見るやさしい目は、あるいはその永遠性をまで見ているのでは無かるうか。永遠は時間の長さでは無く、その微動だにしない一瞬の生の中にもあると思うからだ。

息子らにとり母親とふは分身の賞味期限の無きものらしき

志賀 優子

母親と息子の関係とは、実に不思議なものだと妻と息子の関係を見て思う。世の中に嫁と姑の確執話は掃いて捨てる程あるが、宣なるかなと知る。拔芳歌、息子からの実感と言う事になっているが、何と言う事は無い。それは母親の実感そのものなのだ。遠く離れてしか住む事の出来なかった私達のような故郷喪失者の母はどんな気持だったのだろうか。私と母の姿が悲しくダブって見えた。

眼科医の待合室でたまに逢う友の言葉は逝きし人の名

菅谷 孝子

五十代になって、友達と一緒に集まると必ず話題になるのは病気の事。男も女と同じらしい。人は病を得ず生き死ぬ事は難しい。しかし昔と違って今は既成宗教が心を救う力と文化を失なった。現代人は精神的漂流者となった。傷の舐めあひはそんな現代

人の自己防衛本能なのかもしれない。拔芳歌、そこが眼科医である事が妙に悲しい。

夕暮れて雲間より出る満月の光が窓辺を照らして呉れる 辻本わか子

遠い昔、いつの頃であったか伊豆の川奈で全国大会を実施した事があった。阿部先生としたたかに呑んだあくる朝の伊勢海老の味噌汁のうまかった事が忘れられない。そんな川奈の初冬の風景。日が暮れて、雲間から顔を出した満月。真ん丸である事がなぜあんなにうれしいのだろう。今だに不思議だ。その満月がまるで作者一人の為に窓辺を照らしてくれる。私には結句の「呉れる」がとても美しく響く。

あの人もこの人も彼の世に逝き給ふ遠き日の歌誌涙に潤む 土屋 道子

今年正月創立三十周年を祝った。一時途絶えた時期をカウントしなかった。もう創刊の頃を知っている仲間には作者を含めて幾人も居なくなった。三十年という月日の長さを今更ながら実感する。「あの人もこの人も」どれ程の人達が太陽の舟短歌会を支え、そして死んで行ったか。その寂しさと悲しみを共有出来る私達だからこそ今を大切にする術を知っているのだと、拔芳歌を読みながら作者の想いに共鳴する。

霜月は師走を前にしずかなり友を思ひて長き文かく

角田 順子

私には上句がとても新鮮で驚ろきだった。毎月変わり無く忙しく同じ様な毎日を生きている私にとって霜月が嵐の前の静けき月であると言う生き様のメリハリにまず感動した。そしてそんな時は友へ長き手紙を書くと言う。生きていと言う実感はこの充足感の中にあるのである。職辞して三年、今だに自分の生活を確立出来ない自分を深く反省した。

冬草は地に這ひ細き白き根にあまたの土を掴みて抜く

富永 道子

七首の表題は「見えない絆」。この表題に含まれる作者の歌おうとする世界は万物の有限無限、幽玄夢幻であった。短歌を詠もうとする者は誰だってそう考えていると、誰もが言うであろう。私もそう思っているから。しかし、夫君を失ってから作者のそれを見る目は一段と厳しくなった様に思う。冬、地を這う雑草は、生きる為沢山の土を掴む。それは限りあるものの悲しい性。でもそれは又無限循環でもあるのだった。

コーヒーの煙の行方ジツと見む夕餉のあとの音なき時

富原 澄枝

不思議な一首。「コーヒーの煙」をどう理解するのか。「見む」とあるから意識的に見ようとし

ている。とすると、この煙は単なる湯気では無い。亡き人と結び付く心象と捉える事も出来よう。だからこそ、夕餉を終えた心のたゆたいの中から音が消えて行った。作者は一種言い知れぬ夢幻の世界の中にあるその煙の先でいったい何を見ようとしたのであろうか。

最近はこのように緊張したことはなかったと思うカラオケ大会

野村富久子

作者は千葉支部の人。支部歌会にはほとんど出席なさらず、しかし毎月きちんと七首歌を出し、欠詠した事は無い。作者は多趣味であり、現役を退いた後本当に人生を楽しんでいる様に思う。多くは外国旅行の歌や亡き父の歌を詠むが、どの歌を読んでもそこにあるのは童女のように素直で明るい世界。拔芳歌も何の飾りも無い思ったままの世界。それでいてどこか温かい。

飛行機の腹より海月の十五・六、夕やけこやけの流れる中に

村田 一江

習志野の航空自衛隊落下傘部隊は日本最強の落下傘部隊であると言う。私の友人で落下中に足を怪我して除隊した人が居る。作者は次々と下りて来る白い落下傘を海月と表現した。今越前海月は海を荒らしているが、白く美しいだけに、その禍禍しさは極だつ。そして、それが降りて来た時に

前々号 (302 号) 秀歌拔芳

五時を知らせる「夕やけこやけ」のメロディーが流れて来た。平和の象徴の音楽と、禍事の象徴の落下傘部隊。その対比が生き生きと輝いて強い。師走空かがよひ遠く一つ星主宰の在さむ 両の掌合わす

諸 幸子

「合わす」は「合はす」。作者は御主人が亡くなった時、四国遍路を成し、その後も坂東等の霊場を回っている。先に最近の既成仏教の信仰文化が喪失したと書いたが、作者には強い信仰心が強く息衝いている。三百号記念号を発行し、太陽の舟短歌会も一つの区切りが付いた。しかし、私にとって主宰は永遠だ。師は神となって天上に在す。その事を改めて自覚させられた。

剥き出しの太古の地球見ることし秘境に難無く佇てる
におのく

渡辺 幸子

私達は太古の地球を見る事は出来ない。しかし地球上に残された太古らしき物を見る事が出来る。その一つがグランドキャニオンである事は良く知られている。「ごとし」比況の助動詞、くのようにだと訳す。拔芳歌の場合「ごとし」としか言い様が無いのであろう。それ程に凄い光景と言えよう。しかし拔芳歌の凄さはそこでは無い。こんな荒々しい秘境に難無く佇てる事におののいている事、そこに作者は人間の驕りを見る。歌人の目だ。

年金の定期便たり届けども見込みの額に先行きの不安

伊藤 モト

同感だ。年金行政は国家詐欺。詐欺犯は逮捕され罰せられなければならないのに、歴代の厚生大臣、厚生官僚は誰も罰せられず、あまつさえ国会議員は議員年金、官僚は天下りの後高額年金。そして国民は支給額を減らされ、更に支給年まで下げられた。年金をあてにして老後の生活を考えていた国民は今途方に暮れている。歴代の厚労省の大臣や役人の資産を没収して国民に回せと言いたい。私は高校入学からいつも国家に騙されて来たように思う。国家とは役人とは議員とは一体何なのだろうか。そして国民とは。

サイフォンのランプの灯りゆらめきて豊かな香りひとりじめする

岡崎 くに

悲しい歌評を書いた後、こんな豊かな人生を生きている人の居る事に日本も捨てたもんじゃないとしみじみ思う。作者は長く喫茶店を経営し生活を支えて来た。コーヒーの香りは作者の生活そのもの。その馥郁たる香りをひとりじめすると言う作者の思いは自分の人生の肯定に外ならない。高齢でありながら尚かくしやくとし現役を続ける作者のその元氣と人生の生き方を「人生の旅路」七首から教えられた。

作歌の目・作歌の技法(第六十二回)

作歌の技法(長歌編)

三木 勝

これまでは短歌を作るにあたっての技法を述べてきた。短歌を作るにあたって、定型を遵守すること、己の感動を読むことが大切であると述べてきたが、一方、短歌の構造への配慮も大切であると述べた。短歌における起承転結の構造においては、起承の部分は、叙事であった。この叙事とは何かを知り、叙事を踏まえて後半の七七、転結に入ってゆくことによって、歌は歌となる。歌が歌となるのは、五七五で叙事を踏まえていて、七七で作者の意思の表明をなすときである。叙景歌はさて置き、歌の構造や機能は、かくなるものとして、作歌の修練をするならば、作歌上の基本構造・基本動作が分かって、行動しやすくなるであろう。作歌上の基本動作は、自然と身に付くまでに、繰り返すべきである。このことによって、良い歌は自ずから生まれてくる。

さてこのようなことを踏まえて、長歌を見てみると、叙事を学ぶ上で、長歌は優れていることが分かる。五七五七七の繰り返しで始まる長歌は、最後を五七五七七で終える。ここまでは歌謡であるが、筆者はこの部分を長歌の基歌と呼ぶ。この基歌に反歌が加わって長歌とする。

基歌のほとんどは叙事からなる。その叙事を踏まえて、最後の五七五七七の部分で、事実・客体から作者の主情・主体

を導きだしてくるのである。そして更に、歌謡・基歌の全体を踏まえて、反歌を読む。

短歌は、基歌の最後の五七五七七や反歌形式の五七五七七から生まれてきたものと考えられる。次の長歌では、基歌の最後の五七五七七は「ハモニカの音いろ清らに流れくる山越え野越え(穂高よさらば)」であり、反歌は「春浅きひかり集めし隅田川時代映して緩らかに流る」である。

隅田川のほとりにて

須澤 漢子

竹芝のホテルアジュールに亡き夫をしのぶ会とふ誘ひに心おどりと訪ひゆけば隅田川のほとり高層のホテルに集ふ友人の白髪目立ち老いたれど夫在りし日々設計の技を競ひて東京の地下鉄支へし戦士たち年古りたれど友情の熱き絆の胸を打つ窓の外には隅田川春の陽浴びてさざ波のきらめく川面を舟のゆく宴果つる頃亡き夫の好みて歌ひし山のうた口ずさむこゑたちまちに友ら肩寄せ歌ごゑのたかまり遙かひびきゆく山に眠れるわが夫の目醒めて吹くやハモニカの音いろ清らに流れくる山越え野越え(穂高よさらば)

反 歌

春浅きひかり集めし隅田川時代映して緩らかに流る

この長歌の基歌の叙事の力を検証しかつその調べを味わっていただきたい。この基歌の最後の部分や反歌を一首独立の短歌としてみるとその独立性は弱い。一首としては立てない。しかし長歌の中では力を持つ。なぜか。

(続く)

文語で短歌を詠む人のために (十八)

奥田 清

〔六〕 推量の助動詞

(8) む(ん) むず(んず)

(1) 推量(だろ・ているだろう)

秘せられし救世観音の夢いくつ星降る夜の翼とならん
水底に、うつそみの面わ 沈透き見ゆ。来む世も、私の寂
しくあらむ (釈 迢空 海やまのあひだ)
この月の十五日に迎へに人々まうで来むず。 (竹取)

(2) 意志(う・よう・するつもりだ)

彷徨へる魂を送らむ鳥たちの翼の限り風吹く限り
万葉の流れこの地に留めむと生命のかぎり短歌詠みゆかむ
(呉 建堂 臺灣万葉集)

秋風の吹かむをりにぞ来むず。待てよ。 (枕草子)

(3) 適当・勧誘(するがよい)

子といふもの、なくてありなむ。 (徒然草)

(4) 仮定・婉曲(もし…としたら・ような)

歌などよまむには、世の常なり。 (枕草子)
思はむ子を法師にしたらむこそは、いと心苦しけれ。 (枕
草子) (僧にするとしたら)

活用の型は「む」は四段型。「むず」はサ変型である。

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	接統
む	○	○	む	む	め	○	
むず	○	○	むず	むずる	むずれ	○	用言の未然形

※「むず」は、「むとす」から転じたもので、「む」を強調した言い方である。古典には使用例が多い。しかし、現代短歌では、ほとんどみかけない。

※「む」の未然形に、古くは「ま」があって、接尾語の「く」がつき、「まく」の形で、使われた例がある。

うつそみのいのち一途になりけり生れまぐ近き吾子をおもへば (五島美代子 暖流) 接尾語「く」は体言化するので「生れるだろ・うことが近い吾子」の意で、(まもなく生まれる我が子)と解すればよい。

(9) けむ(けん)

過去推量(たであろう。たのだろう)

歎けとていまはた目白僧園の夕の鐘も鳴りいでにけむ (北原白秋 桐の花)

われをすててかけらひいにし魂よけだものの群にまぎり入りけむ (佐々木信綱 常盤木)

活用の型は、四段型で「む」と似ている。

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	接統
けむ	○	○	けむ	けむ	けめ	○	用言の連用形に

※「けむ」が体言の上に用いられて、過去の事実を伝聞的に表現していることがある。

増賀聖の言ひけむやうに、(徒然草)：「たとかいう」

第十二回（平成二十二年太陽の舟短歌会）

全国大会のご案内

ようこそ那須塩原へ

大会委員長 高嶋邦彦 代表

大会幹事支部 月の船支部

大会実行委員長 川村貴美 月の船支部長

実行委員長代行 松木昭子 月の船会員

事務局 伊藤モト 月の船会員

開催日時 六月二十七日（日）・二十八日（月）

集合時間・場所 午前十一時 那須塩原駅

開催場所 明賀屋本館

住所 栃木県那須塩原市塩原353

☎0287(32)2831

参加費用 全行程参加 一九〇〇〇円

歌会のみ参加 五〇〇〇円

投稿歌のみ参加 二〇〇〇円

参加申込 左記まで費用の納入をもって申込とします。

納入先 口座名義 太陽の舟短歌会

締切 西麻布郵便局 〇〇一三〇—九—三八九六九

大会詠草 四月三十日（金）締切後の取り消しはキャンセル料が発生する場合があります。

参加者は四月三十日（金）までに（必

着）大会出詠一首（未発表の作品に限る）を編集部

（〒262-0045 千葉市花見川区作新台1-18-13

松岡 三天）まで郵送して下さい。返信用封筒は

不要です。参加者全員の詠草を六月号に掲載します。

日程・内容

第一日（六月二十七日）

11：00 那須塩原駅（東北新幹線・東北本線）集合

11：15 那須塩原駅出発（バスにて郷土資料館・吊り橋など観

光）

12：00 昼食

15：00 明賀屋到着

15：00 受付・入室

16：00 役員会

16：30～17：30 講演会 講師 須藤宏明盛岡大学教授

18：00～夕食・宴会

20：30～21：00 企画広報委員会

第二日（六月二十八日）

7：00 朝食

8：30 写真撮影 歌会会場へ

9：00～12：00 歌会

12：00～13：00 昼食

13：00～14：30 歌会

14：45～15：20 表彰式・運営懇談会（全員参加）

15：30 解散

歌会報告

本部歌会 2月例会(第360回) (富永記)

日時 2月6日(土) 13時〜17時

場所 きゅりあん(品川区立総合区民会館)

出席 26名 出詠 31首・司会 松岡編集長

春にはまだ遠い日和の中、新年初回の本部例会。歌会後、歌誌保管への明文化や上梓所(庄司会員宅)へのフォローなど、他にも数項目が役員会で話し合われました。

高得点歌

・惚けたる鬼の棲み初むわが屋内詮なしされど豆買ひに行く

中村 陽子

・吾よりも長く寄り添うかも知れぬ今編み上げしセーター畳む

宮原喜美子

洪谷支部 支部長/志賀 倭子 (生稲記)

日時 2月6日(土) 10時〜12時

場所 きゅりあん(品川区立総合区民会館)

出席 7名 出詠 7首・司会 生稲 進

・冬枯れの山野に淋しくてっせんの白い花びら吾を迎える

丸山孝一郎

この歌の眼目である「冬に咲くてっせん」があるということを強調すべきで、「冬てっせん」としたらどうか。みんなで添削した結果「未枯れたる山野に淋しき冬てっせんの白い花びら吾を迎える」になりましたが結句も再検討が必要、宿

題になりました。2月号の丸山、武田両同人の歌についての評も行いました。

水戸支部 支部長/長須 正文 (塩田記)

日時 2月14日(日) 13時〜16時

場所 びよんど(男女センター)

出席 7名 出詠 11首・司会 塩田 秋子

長須先生のミニ講義は自己の内面を深く見つめた福田栄一の歌。歌会に入って特に言葉の使い方を沢山勉強した。

・蓮田より遠くとはくにのぞめたる富士のあかきを夫は告げくる

水戸支部 支部長/長須 正文 (塩田記)

日時 2月21日(日) 10時〜12時

場所 岩間公民館

出席 6名 出詠 10首・司会 深谷 充代

寒い時期の歌会もこれで終りか。6名が熱心に智恵を絞ってよい学習を楽しんだ。

・若き日の気負ひも今は愛しかり張り合ふことなき日々の気楽さ

岩橋千代子

柏支部 支部長/末次 房江 (富永記)

日時 1月15日(金) 12時〜15時

場所 アミューゼ柏

出席 10名 出詠 22首・司会 富永 道子

本年初めての支部歌会。健康で楽しく詠草を続けようと会話しました。

・カーテンの向かふの赫き実をゆらし燃える朝日にメジロ飛び立つ 深谷 幸子

・瀬戸内の冬至の夜明け送り来しメールに故郷の海辺を恋ひぬ 富永 道子

柏支部 支部長／末次 房江 (角田記)

日時 2月19日(金) 12時～15時

場所 アミューゼ柏

出席 11名 出詠 26首・司会 角田 順子

雨水を迎え肌にくる冷たさも和らぐ日、久しぶりに木林静子様も出席、はじめに富永同人より会計報告があり、柏から野口勝様が見学にこられ、歌評も活発で和やかな熱気ある会でした。

・山間より不意にひとすじさきたる奥那須の朝日言葉にならず 塚本 正子

・上野駅に薬に囲まれし牡丹あり行き交ふ人の春のまなざし 角田 順子

大田支部 支部長／庄司 久恵 (川村記)

日時 1月25日(月)

場所 大森山王高齢者センター

出席 8名・司会 川村 貴美

今月も講師三木先生がおいで下さいました。一首一首充分に時間をとって考えることができる支部会の良さが感じられました。

・追ひ越してゆく若者の背中より紫煙にほひ来寒月の下

山名 恒子

若さへの羨しさ、煙が動く微かな匂い、永遠に変らぬ寒月の下の静けさ、若者と自分との人間同志のコミュニケーション等が読者に伝わってくる一首でした。

千葉支部 支部長／照山 好子 (照山記)

日時 2月20日(土) 13時30分～16時30分

場所 穴川コミュニティセンター

出席 14名 見学者1名 出詠 17首

司会 森五貴雄

見学者、角本さんをお迎えしての互選互評、和やかな年明けの例会となった。例会後、会場近くの店で新年会。美味しいお酒と料理で大いに盛り上がった。

・半丁の豆腐小鍋に夕の膳湯気立つ部屋に温もり増しぬ 富原 澄枝

・遠くより悲鳴のごとき救急車消えゆくまでの深夜の鼓動 村田 一江

掲示板

平成21年度NHK全国大会において河野静子さん(渋谷支部)の次の歌が入選されました。大慶です。

・今日ひと日内なるもののあまたあり愛しく過ぎて夕暮近し

お詫びと訂正 (三月号)

6頁 上段行目 新年↓信念

36頁 上段(6)つ・ね↓つ・ぬ

下段2行目 宮冬二↓宮柊二